

ベトナムにおける日本系銅鏡

久保 智 康

はじめに

日本の中世・近世における東南アジアとの交流を、工芸品というモノに即して理解しようとする試みは、陶磁、漆工、金工の各分野で比較的多く進められてきた。また茶道具を「南蛮」「安南」といった名を冠して呼ぶことも、学術レベルを超え、文化として古くから行われてきた。そのようなことどもは、日本人の異国趣味という対外意識、あるいは受用者の階層、そしてそれらを基底とした器物の受容と流通、等々の諸問題として学問化されるのが通常である。つまりいずれの場合でも、南洋からもたらされた器物を珍玩する主体としての日本人論、という枠組みへと議論は収斂していくことになる。

しかし、現実の工芸品の動きは、東南アジアから日本へというだけでなく、その逆の事例も少なからずあったのだが、そこに着目した研究は驚くほど少ない。唯一の例外は、輸出漆器研究であろうが、これはヨーロッパ向け器物の媒介者としてのオランダ東インド会社

と、中継地としての東南アジアの港市への関心が専らである。現代日本の国民性として、海外諸国の人々の対日本人観を非常に気にする、ということを経る論調があるが、その真偽はともかくとして、こと前近代の東南アジアの人々の対日本人、あるいは対日本文化観に関心を示す工芸・考古研究者はほとんどいないのではなからうか。筆者は、そのような問題関心の穴を埋めうる素材のひとつとして、東南アジアにもたらされた日本金工品の調査を行ってきた。なかでも、十六世紀から十八世紀にかけて製作された日本系銅鏡が、インドシナ半島東沿岸部のベトナムに集中して存在する事実を確認し、中国発見のものと合わせ、それらの一端を報告している（以下、先稿⁽¹⁾）。小稿では、これまでに実見し得た事例を改めて紹介し、それらの存在する意味を考察する。

一 日本系銅鏡の事例

(1) 日本系銅鏡の分類

日本系銅鏡とは、日本で製作されたものと、日本鏡をもとにして

製作されたものの両方を指す。朝鮮半島における十一世紀の瑞花双鳳八稜鏡が初現で、その後十九世紀の柄鏡まで各時代のもものが、半島から中国東北部、中国南部、インドシナ半島の諸地域で出土、あるいは伝来している。⁽²⁾ 先稿では、これらをⅠ類～Ⅳ類の四類型に分類したが、本稿では、Ⅰ類を細分する。それぞれの要件は、以下のとおりである。

Ⅰ類…日本からの舶載鏡。文様鑄出が比較的良好なものが多い。

Ⅰa類…鏡胎に改変を全く加えていないもの。

Ⅰb類…吊り紐を通す小穴をあけて懸鏡として用いたもの。柄鏡の柄を折り取り、跡を丁寧に磨り消して円鏡にした例が大半だが、まれに柄鏡のまま紐穴をあけて懸鏡としたものもある。

Ⅰc類…b類と同様、柄の跡を完全に磨り消して円鏡としながら紐穴がなく、何らかの鏡台に載せて用いたと判断されるもの。なお柄が鏡面側に折れたものも少なからず存在し、これらも鏡台に載せて用いるため意識的に柄を折り取った可能性が高い。

Ⅱ類…日本からの舶載鏡を踏み返し製范して鑄造したもの。円鏡の場合、鈕部分だけは、范の凹みに鈕穴のための芯棒を設置するなど、新たな造作を加えなければならず、鈕形状に大なり小なりの変形をきたすので判りやすい。一方柄鏡は、柄の形状や鏡面との境の段差が日本鏡と微妙に違い、周縁幅が一定しなかったり、文様鑄出が著しく不鮮明で、銅質も異なるものが多い。

Ⅲ類…日本からの舶載鏡を踏み返した後に、柄や周縁、鈕の形状を現地のスタイルに改編したもの。鏡胎形式が大幅に変わり、文様部分のみが原型鏡の状態を留めている。

Ⅳ類…日本鏡由来とみられる鏡胎形式でありながら、文様を現地独

自の意匠としたり素文としたりするもの。范型への文様の施刻技法などに大きな違いがみられる。

これらの各類型は、ベトナム現地での日本鏡の受用の在り方を明確に反映している。具体的には、鏡の使用状況や模倣製作、さらには現地の人々の文様理解、といったことまで読み取ることができる。以下では、この類型に則って作品の概要を述べる。

(2) 日本系銅鏡の概要

「Ⅰa類」

1. 二重輪桐紋散柄鏡 (カラー図版18、図29-1-2) 日本・個人蔵
面径九・八cm 縁高〇・四cm 縁幅〇・二cm 柄長一〇・四cm
柄幅一・七cm

十七世紀に日本人町が作られたベトナム中部の町、ホイアン付近で収集されたもの。鏡面よりも長く幅狭の柄が付く古式の柄鏡である。直立細縁。二重輪に五三桐紋を三個散らした文様を鑄出す。このような紋散しは、桃山時代から江戸時代初期にかけて工芸全般で流行した意匠である。砂目地が細かく、文字通り砂を蒔いたように打たれるのも古式柄鏡の特色で、桃山時代(十六世紀後葉～十七世紀初)の製作になるとみている⁽³⁾。銅色は暗緑色を呈し、文様鑄出の良好な精良鏡である。下方には「天下一」銘を陽鑄する⁽⁴⁾。鏡面には鍍錫が薄く残り、また多数の擦痕を認める。背面の所々に黄土色の土が薄くこびりつく。

2. 松葉散柄鏡 (カラー図版19、図30-1-2) 日本・個人蔵
面径九・二cm 縁高〇・四五cm 縁幅〇・二cm 柄長八・三cm
柄幅一・九cm

ホイアン付近の墓で出土したものと伝える。表面に白い土が固着

するが、旧所蔵者の談によると、中部地域の墓出土品には、この種の白土が付着しているケースが多いという。以前には、子供が小遣稼ぎで墓から品物を掘り出し古美術商に持ち込むことがしばしばあったらしい。本品の鏡面には、緑青と白土の境が径八・八cmの円形となり、もう一面の鏡が重なった状態で副葬されていた可能性が高い。径三寸の円鏡に長めの柄が付く直立細縁の柄鏡で、背面には細かな松葉を散らす。これは、松葉文の原体を鑄型に押しつけて表したものである。砂目地は細かく、ややまばらに蒔いたように打つ。江戸時代初期、十七世紀前半の製作とみられる。銅質や鍍錫は錆のため不明。下方に「天下一」銘を陽鑄する。

3. 柴垣梅樹柄鏡 (図31) 日本・個人蔵

面径一〇・八cm 縁高〇・四五cm 縁幅〇・二cm 柄長一〇・二cm 柄幅二・二cm

ベトナム中部のダナンで出土したものと伝え、茶色の土が若干付着している。鏡面とはほぼ同じ長さの柄が付く。直立中縁。右寄りに柴垣と梅樹を描き、下方には土坡と草らしい意匠を表す。文様は柔らかく、やや高い肉取りである。砂目地は細かく、ややまばらで等間隔気味に打つ。江戸時代前期、十七世紀の製作になる。銅の色味は暗茶色で、本来施されていたはずの鏡面鍍錫はほとんど残っていない。左端に「天下一」銘を陽鑄する。

4. 万両柄鏡 (図32) 日本・個人蔵

面径一〇・六cm 縁高〇・四cm 縁幅〇・二cm 柄長九・五cm

ダナンで収集されたもの。所々に黄灰色の土が硬くこびりついていて、出土鏡とみられる。直立中縁。中央に大きな万両を薄肉に表す。ほぼ同寸の鏡面になる前掲、柴垣梅樹柄鏡よりも柄が短くなり、

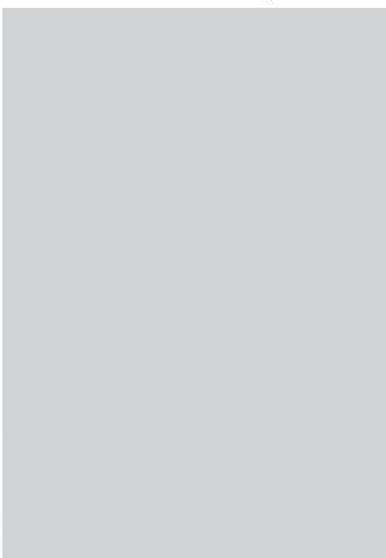
江戸時代前期から中期、十七世紀後葉から十八世紀初め頃の製作とみられる。砂目は細かく、ややまばらに打つ。文様鑄出は鮮明だが、柄が付け根で鏡背面側にやや曲がっている。地金は新しい傷の箇所が黄味の強い赤銅色を呈する。錆のため、鏡面に鍍錫は確認できない。

5. 山水柄鏡 (図33-1・2) フエ王宮美術館蔵 (BTH1226) [DG10-7-439]

面径一〇・二cm 縁高〇・三cm 縁幅〇・二cm 柄長八・六cm 縁幅二・一cm

若干の緑青を生じているが、鏡面は磨かれており、フエの王宮周辺に伝世した可能性が高い。直立中縁。溪谷に松竹と森林、山景を描き、その間に小さく楼閣を描く。上方には鶴が飛翔し、蓬葉文ともいえる図様を薄肉に表す。砂目は細かく、密に打つ。文様鑄出はきわめて鮮明である。左端に「天下一藤原作」と銘を陽鑄するが、天下一の三文字は鑄型の段階で意図的に消されている(挿図1)。幕府は職人が「天下一」を名乗ることを天和二年(一六八二)に禁止し、鏡師もしくはこれを自粛した模様で、本鏡の銘はまさにこの時期のものともみられ、江戸時代前期から中期、十七世紀後葉から十八世紀初め頃の製作とみるこ

とができる。地金は黄銅に近い色調で、鍍錫は残らない。



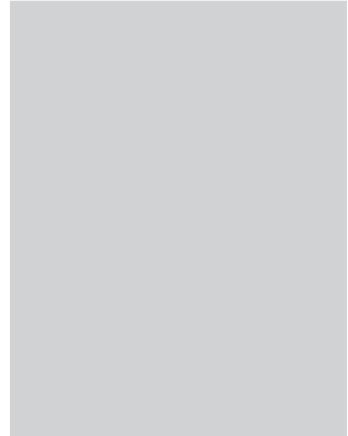
挿図1 山水柄鏡 陽鑄銘

6. 桔梗紋柄鏡 (図34) ホーチミン市ベトナム歴史博物館蔵

(B T L S. 390512)

面径一二・三 cm 縁高〇・三 cm 縁幅〇・一 cm 柄長八・九 cm

中央に桔梗紋を大きく薄肉に鑄出し、その直下に「田中伊賀守」の銘を小さく陽鑄する (挿図2)。田中伊賀守は、



挿図2 桔梗紋柄鏡 陽鑄銘

十七世紀後葉に京都三条通柳ノ下 (寺町東入ル) に居住したことが、『京羽二重』などの地誌により知られる。上記の特徴や、鏡胎が厚く、周縁を低い細縁とする点など、典型的な田中伊賀守の作風である。やや大粒で、密に打った砂目の鑄出はあまく、踏み返し鏡であることは明らかだが、鏡胎の作行きや、紋上面と鏡面に鍍錫がよく残ることから、日本からの舶載鏡がベトナムで良好な状態で伝世したものと判断される。四寸鏡で三寸弱の柄がつくので、前述した地誌に名前の見える時期、十七世紀後葉から十八世紀初め頃の製作とみていい。地金は褐色がかった黄銅色である。

7. 隅切角に世字紋柄鏡 (図35) 日本・個人蔵

面径一〇・六 cm 縁高〇・三五 cm 縁幅〇・二 cm 柄長四・〇 cm (現存長) 柄幅一・九 cm

ベトナム中部のフエで収集されたもの。柄が途中で折れた状態で伝世していたらしい。直立中縁。地を霰地とし、中央に大きく隅切角に世字紋を表す。表面に鍍錫がよく残っている。柄の長さが分かつ時期を絞り込みにくいですが、本来「天下一藤原作」とした銘の「天

下一」を削除した痕跡がある。前掲の山水鏡と同じく、十七世紀後葉から十八世紀初め頃の製作といえよう。

8. 蓬葉柄鏡 (図36) ハノイ歴史博物館蔵 (I3107「LSb

2336」)

面径一四・七 cm 縁高〇・三 cm 縁幅〇・二五 cm 柄長九・三 cm 直立中縁。土坡に大きな松樹と、その脇に竹、上方に首を下に向ける双鶴、土坡上の亀などからなる典型的な蓬葉文をやや高肉に表す。砂目は細かく、やや密に打つ。左端に「天下一藤村武重」の銘を陽鑄する。全体にやや鑄出があまいが、平滑な鏡面の仕上げや、鏡面と柄の境の段差、黄味がかった赤銅色の色調など、日本鏡とみていい。藤村武重の作例は比較的少なく、動向もあまり明確でない。文様と法量から、江戸時代中期、十八世紀前半の製作とみられる。

9. 南天柄鏡 (図37) ホーチミン市ベトナム歴史博物館蔵

(B T L S. 390511)

面径一四・三 cm 縁高〇・二五 cm 縁幅〇・二 cm 柄長七・三 cm (現存長)

柄先が折損しており、その跡を丁寧にヤスリがけしている。直立中縁。土坡に立つ南天を表す。砂目はやや細かく、密に打つ。左端に銘を陽鑄する「藤原光政」は、江戸中期、十八世紀を中心に京都で活動した鏡師で、文様をごく薄肉に表し、鏡胎が薄いという光政工房の特色がよく出ている。鑄出は全体にあまいが、鏡面に鍍錫を良好に残し、鏡胎にも不審な点はないので、日本からの舶載鏡と判断できる。地金は褐色がかった黄銅色である。

10. 花橘字几帳御簾図柄鏡 (図38) フエ王宮美術館蔵 (B T H

1264「DG10121433」)

面径二三・四 cm 縁高〇・三 cm 縁幅〇・三 cm 柄長九・五 cm
柄幅三・八 cm

背面に緑青をわずかに生じるが、全体に状態は良好で、鏡面に鍍錫をわずかに残す。フエの王宮周辺に伝世した可能性が高い。径八寸弱の大型鏡面に短めの柄が付く柄鏡である。直立中縁。几帳の陰に檜扇、背後に御簾を薄肉に表す。大きく「花橘」の文字を表すことから、この図様が『古今集』の「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」、あるいはこの歌を引く『伊勢物語』六十段の譚を暗示する御所解き文様であることが知られる。砂目は大粒で、ややまばらに打つ。文様鑄出はあまいが、鏡胎や白っぽい黄銅色を呈する地金は、日本鏡の特色を示す。左端に銘を陽鑄する「天下一藤原政重」は、江戸後期から明治初年にかけて、京都・東洞院松原上ルに居住した西村豊後守藤原政重のことで、本鏡も十九世紀前半頃の製作とみられる。

11. 蓬萊鏡 (図39) 日本・個人蔵

面径一一・一 cm 縁高一・一 cm 縁幅〇・三 cm

ホイアン、もしくはダナンで収集されたと伝える。高く直立する中縁の円鏡で、二重界圈、亀甲形鈕。松樹と双鶴、亀からなる蓬萊文を表し、下方に岩と水辺を描く。鈕の亀と双鶴が嘴を接する図様を特徴とする。このような鏡胎、図様の蓬萊鏡は、室町時代末頃から見られるが、本鏡は文様の形式化が著しく、また上方に五三桐紋を加えていて、江戸時代前期、十七世紀後半の製作とみられる。文様が不鮮明なのは踏み返しを重ねたことによると思われるが、鈕の状況などからみて、日本における踏み返しと考えていい。鏡面には、赤味を帯びた銅地金が観察でき、わずかに鍍錫を残している。

「Ib類」

12. 橘樹柄鏡 (図40) ハノイ歴史博物館蔵 (I25488)

〔LSb2337〕

面径一一・五 cm 縁高〇・四 cm 縁幅〇・二五 cm 柄長一〇・三 cm

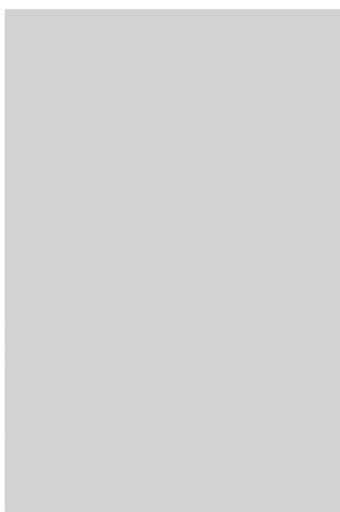
直立中縁。大きな橘樹を鏡背いつばいに描く。肉取りはやや高い。砂目はごく細かく、密に打つ。鑄出はややあまいが、平滑な仕上げの鏡面に鍍錫がわずかに残り、鏡面と柄の境の段差が明瞭なことから、日本鏡と判断される。左端に銘を陽鑄する「天下一佐渡」は、江戸時代前期、十七世紀後半の年紀鏡が知られる人見佐渡(当時、室町二条下ルに居住)のこととみられ、本鏡も同期の特色を示す。銅質は錫を多めに含む白銅質に近い。興味深いのは、このようなしつかりとした柄鏡にもかかわらず、上方に径一・八mmの紐穴を二個あけ懸鏡として用いたことで、ここにベトナム個有の鏡使用法が見出せよう。

13. 南天双鶴柄鏡 (図41) フエ王宮美術館蔵 (BTH1226)

〔DG10181439〕

面径一〇・三 cm 縁高〇・三 cm 縁幅〇・二 cm

全面が暗茶褐色を呈するが、緑青はみられず、フエの王宮周辺に伝世した可能性が高い。直立中縁の柄鏡の柄を切り取り、上方に不整形の大きめの紐穴をあけて、懸鏡として用いたもの。南天を大きく描



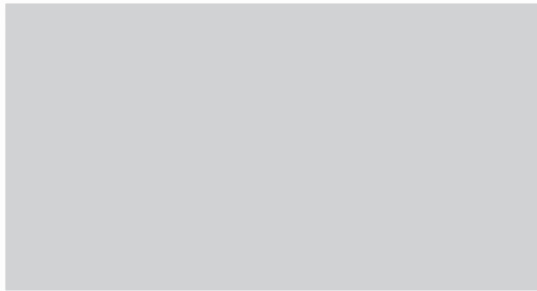
挿図3 南天双鶴柄鏡
陽鑄銘字

き、左方に飛翔する鶴と降り立った鶴を薄肉に表す。砂目は細かく密に打つ。文様は鮮明で、日本鏡と判断される。左端に「天下一藤原作」と銘を陽鑄するが、天下一の三文字は鑄型の段階で意図的に消されている（挿図3）。前掲のIa類、山水柄鏡などと同じように、江戸時代前期から中期、十七世紀後葉から十八世紀初め頃の製作とみている。鏡面には鍍錫を認めない。

14. 下がり藤紋散松樹柄鏡（図42） 日本・個人蔵

面径一〇・八cm 縁高〇・四cm 縁幅〇・三cm

ベトナム南部のホーチミンで収集されたもの。直立中縁で、柄の跡を丁寧磨り消している（挿図4）。上端に直径約1mmの紐穴を二個あける。上半には下がり藤紋を三個散らし、下半に松樹を薄肉に鑄出す。図様じたいは古様であるが、地にやや粗い砂目をまばらに等間隔に打つのは後出的で、江戸時代前期～中期、十七世紀後半から十八世紀前半の間に製作されたとみられる。文様の鑄出はやや不鮮明ながら、中央付近に鑄型の挽目をわずかに観察できる。左端に「天下一」銘を鑄出する。銅の色味は薄茶色で、鏡面の鍍錫はほとんど残らない。



挿図4 下がり藤紋散松樹柄鏡 柄の跡

15. 鶴丸紋菊唐草柄鏡（図43） 日本・個人蔵

面径一五・〇cm 縁高〇・四cm 縁幅〇・三五cm

ダナンで出土したものと伝える。直立中縁で、柄の跡を磨り消している。上端に直径約3mmの紐穴を二個あける。内区に鶴丸文、外

区に下から左右に派生する菊唐草文を、薄肉に鑄出す。砂目はやや大粒で、密に砂を蒔いたように打つ。左端に銘を陽鑄する「藤原重義」は、松村因幡守と受領名を名乗った鏡師で、寛文年間から延享年間、十七世紀後半から十八世紀前半の年鏡鏡が知られる。本鏡は「天下一」を冠せず簡略に名前のみを表していることから、十七世紀後葉の製作と考えうる。銅の色味は暗茶褐色で、鏡面に鍍錫は認められない。部分的に薄い緑青を生じている。

16. 虎字竹梅柄鏡（カラー図版20） 日本・個人蔵

面径一〇・三cm 縁高〇・三cm 縁幅〇・二cm

ホイアンで収集されたと伝える。直立中縁で、柄の跡をきわめて丁寧に磨り消している。上端に直径約2mmの紐穴をあける。左上方に異体字の「虎」を据え、右方に竹と梅樹をやや高肉に表す。同種の文字と図様は、径五寸鏡の事例が知られる。砂目は細かく密に打つが、文様、砂目地とも鑄出は相当不鮮明である。本鏡の同型鏡（日本伝来）のように、この種の文字は角が角張るのが常であるが（挿図5）、本鏡の虎字は角に細かな鑿を入れてなめらかにしている（挿図6）。この作業を日本、ベトナムのいずれで行ったか明確にしない。文字入鏡は江戸中期以降に流行するので、陽鑄銘「藤原重義」（松



挿図6 虎字竹梅柄鏡の「虎」字



挿図5 虎字竹梅柄鏡（日本伝来）の「虎」字

村因幡守藤原重義のこと、前掲、鶴丸紋菊唐草柄鏡の項を参照)の活動期のうちでは、後半期の十八世紀前半の作例とみている。なお鏡面は丁寧に研磨されているが、鍍錫を残さず、細かな打痕が見られる。全体に暗茶色を呈し、地金は黄味を帯びた赤銅色である。

〔Ic類〕

17. 霰雲菊花紋柄鏡(図44)

ホーチミン市ベトナム歴史博物館蔵

(B.T.L.S. 3967)

面径一〇・六cm 縁高〇・二五cm 縁幅〇・二五cm

全体に緑褐色の緑青を生じ、出土鏡とみられる。直立中縁で、下端に柄の痕跡を明瞭に残す。中央に十六弁の菊花紋を隆線で描く。その周りに雲を表すが、雲そのものは霰地とし、背景と菊花紋の中は、大きめの砂目を密に打つ。左端には「天下」の銘を陽鑄する。文様の鑄出は全体にあまく踏み返し鏡とみていいが、鏡胎そのものはしっかりとしており、日本からの舶載鏡と判断される。柄がないので絞り込みは難しいが、図様や砂目地の特色から、江戸時代前期ないし中期、十七世紀後半から十八世紀前半の製作とみたい。地金は黄褐色で、鏡面や紋の上面に鍍錫は認められない。

18. 剣五つ茶の実紋柄鏡(図45)

ホーチミン市ベトナム歴史博物館蔵

(B.T.L.S. 3966)

面径一一・〇cm 縁高〇・二五cm 縁幅〇・二五cm

全体に緑灰色の緑青を生じ、出土鏡とみられる。直立中縁で、下端に柄の痕跡を明瞭に残す。中央に剣五つ茶の実紋を隆線で描き、地にやや大粒の砂目を密に打つ。その周りは菊目地という珍しい地文になる。前掲の霰雲菊花紋柄鏡よりいっそう文様鑄出があまく、日本での踏み返しにベトナムの踏み返しが重なった可能性も否定で

きないが、とりあえず、舶載柄鏡の柄を折り取ったものとみておきたい。地金の色は不明で、黒褐色の古色を呈する。鏡面や紋の上面に鍍錫は認められない。

19. 山水柄鏡(カラー図版21)

日本・個人蔵

面径一〇・三cm 縁高〇・三cm 縁幅〇・二cm

ホーチミンで収集されたもの。直立中縁で、外周下端に幅一・七cmの柄の痕跡を残す(挿図7)。下半に樓閣山水を表して、右上にも山林の遠景と日(もしくは月)を表して、空中に飛翔する鳥を小さく描く。砂目地は細かく密に打つ。文様は薄肉で、所々輪郭線を表現して、江戸時代中期、十八世紀の特色を示す。右端に「天下」の銘を陽鑄する。文様・砂目地はあまく、全体に火を受けたようで、赤黒色に変色し歪みを生じている。地金は白っぽい赤褐色を呈する。鏡面をいたって平滑に研磨し、鍍錫もわずかに残るので、日本製と判断される。しかし周縁の外側を不整形に面取りし、上方には径〇・八mm程度の小穴を途中まであけている(挿図8、矢印)。これが吊紐用の穴かどうか判然としないが、いづれにせよ、ベトナムで施されようとした細工であるのは間違いない。



挿図8 山水柄鏡 周縁外側の小穴



挿図7 山水柄鏡 柄の跡

20. 松樹柄鏡(図46) 日本・個人蔵

面径九・一cm 縁高〇・四cm 縁幅〇・二cm

ダナンで収集されたもの。灰白色のなめらかな土が硬くこびりつき、墓から出土したものとみられる。直立するやや幅狭の中縁。柄の折損した跡がそのまま残る。何段もの枝が水平に伸びる松樹をやや高肉に表す。砂目地は細かく密に打つ。これらは、江戸時代前期、十七世紀の特色である。地金は暗茶褐色で、鏡面に鍍錫は認めない。全面についた土により鑄出の状況は観察できないが、鏡面の平滑な状況から推して、日本製の可能性が高い。

21. 木瓜紋松樹柄鏡(図47) 日本・個人蔵

面径一四・八cm 縁高〇・四cm 縁幅〇・三cm

フエで収集されたもの。所々に灰白色の土が付着し、墓から出土した可能性もある。直立中縁で、柄の折損した跡がそのまま残る。中央の円帯内に木瓜紋を表し、下方には枝を左右に伸ばした松樹を、やや高肉に鑄出する。砂目地はごく細かく、ややまばらに打つ。これらは江戸時代前期から中期にかかる、十七世紀後半の特色である。文様はいたって鮮明で、日本製とみられるが、鏡面は出土古でざらつきが多く、鍍錫は認められない。

22. 向い柊葉紋菖蒲柄鏡(図48) ホーチミン市ベトナム歴史博物館蔵(B.T.L.S. 3904)

面径九・九cm 縁高〇・一五cm 縁幅〇・一五cm

全面に緑灰色の緑青を生じ、出土鏡とみられる。直立中縁で、柄の折損した跡がそのまま残る。水辺に生える葉は中央に筋を表すので、菖蒲(ハナショウブ)の葉であろう。上方には、丸に向い柊葉紋を配する。砂目は細かく、やや密に打つ。鑄出はややあまいが、

日本鏡とみられる。左端に銘を陽鑄する「藤原光長」は、江戸時代前期から中期、十七世紀後半から十八世紀半ばにかけて大坂で活動した鏡師である。本鏡は、鏡胎が薄く、文様の肉取りもごく薄いので、十八世紀の製作と考えられる。鏡面に鍍錫は認められない。

23. 哥字斜綹割付文柄鏡(図49) 日本・個人蔵

面径一二・二cm 縁高〇・三cm 縁幅〇・二五cm

ダナンで収集されたもの。背面の所々に黄白色の砂質土が薄く付着し、また鏡面にも灰褐色のなめらかな土が硬くこびりついて、墓から出土したものと思われる。直立中縁で、柄の折損した跡がそのまま残る。中央に「哥」字を表し、地には、斜行する綾杉・七宝繋ぎ・砂目の縞模様と、水平方向に小粒の霰とごく細かな砂目の縞模様を交差させて表している。日本に伝存する柄鏡中でも、稀な図様といえる。地模様はごく薄肉で、線描に近く、江戸時代中期、十八世紀の特色を示す。左端に「天下一松村因幡守」と銘を陽鑄する。鑄出はいたって鮮明で、日本製とみて間違いはない。地金は暗茶褐色を呈し、鏡面に鍍錫は認められない。

24. 桜花柄鏡(図50) 日本・個人蔵

面径一〇・八cm 縁高〇・四cm 縁幅〇・二cm

フエで出土したものと伝える。両面にごく細かな砂質土が付着する。直立中縁で、柄の折損した跡がそのまま残る。左上方に形式化した桜花文を線描で表し、その脇に出八双形の枠を設けて「天下一因幡守」(松村因幡守であろう)と銘を陽鑄する。砂目はやや大粒で、まばらに等間隔に打つ。いずれも近世柄鏡の中で後出的な特色であり、江戸時代後半期、十八世紀後半から十九世紀前半のものと見られる。文様はやや不鮮明ながら、地金は日本鏡に通有の暗茶褐色を

呈する。鏡面に鍍錫は残らず、中央に細かな打痕を認める。

〔Ⅱ類〕

25. 浮線綾文双鳥鏡 (カラー図版22) ハノイ歴史博物館蔵

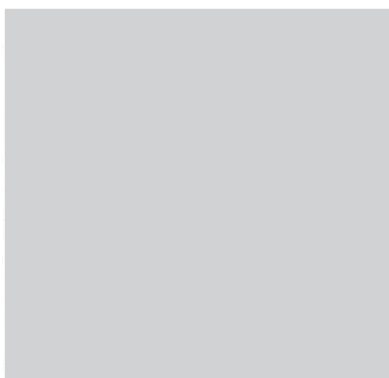
(I12288 [LSb2249])

面径八・六 cm 縁高六・〇 cm 縁幅四・〇 cm

ベトナム発見の日本系銅鏡で最も古い例である。直立中縁で、中央に頭が平坦になる半球形鈕を設ける。外区に連珠文帯と輻線文帯を重ねてめぐらして、従前の和鏡研究で擬漢式鏡と呼ばれる鏡式である。内区には、菊を四個組み合わせた有職文様の浮線綾文を五個めぐらし、下端に向き合う

二羽の小鳥を表している。鏡式と文様は、南北朝時代、十四世紀のものだが、本来円錐形だったはずの鈕形が大きく変わって、踏み返し鏡であることが一目瞭然である。文様も著しく不鮮明で、鏡面に鍍錫は認められない。擬漢式鏡やその踏み返し鏡は、中国・江南や朝鮮半島でも発見されており(挿図9、10)、十四世紀に日本鏡がアジア各地にもたらされたことがわかる。

本鏡は、全面を淡緑色の鍍が覆い、長期間土中に埋蔵されていたことが窺え、原型鏡の製作時



挿図10 草花双鳥鏡
韓国・湖巖美術館蔵



挿図9 牡丹尾長鳥鏡
上海で収集 個人蔵

期からさほど隔たらない頃に踏み返されたものと考えるのが自然である。

26. 竹図方鏡 (図51) ハノイ市・個人蔵

縦四・五 cm 横四・五 cm 縁高〇・二五 cm 縁幅〇・一 cm

フエで収集されたもの。小型の方形懐中鏡。縁は短く立ち上がる中縁で、鈕は山形を呈する。鈕を貫く形で、竹を薄肉に表している。砂目は細かく密に打つが、鋳出はいたって不鮮明である。左下に「天下一」の銘を陽鋳する。この種の小型鏡は、周縁が角張るのが通例だが、本鏡は角がやや丸味をもつ。鈕に穴を保持するためのハバキ跡がつくことも異例で、文様地が微妙に凹凸をなすなど、ベトナムにおける踏み返し鏡の可能性を考えたい。全体に暗茶色で、地金は暗黒緑色の古色を呈する。鏡面に鍍錫は認めない。原型鏡は、江戸時代前期、十七世紀に製作されたものである。

27. 霰地柁に千鳥紋柄鏡 (図52) ホーチミン市ベトナム歴史博物館蔵 (BTL S. 3905・4)

面径八・九 cm 縁高〇・三 cm 縁幅〇・二 cm 柄長八・七 cm

全面に緑灰色の緑青を生じ、出土鏡とみられる。直立中縁。中央に菱形の柁に千鳥紋を配し、地に大粒な砂目を密に打つ。背景は霰地とする。紋の直下に「天下一」の銘を陽鋳する。左下の周縁がややへこみ、上面がわずかに膨らんで、ここに湯口を設定して、仕上げが不十分だったと考えられる。文様鋳出もいたってあまいので、ベトナムでの踏み返しを想定したい。面径とほぼ同じ長さの細い柄がつくので、原型鏡は江戸時代前期、十七世紀半ばから後半に製作されたものと思われる。鏡面に鍍錫を認めず、線上の打痕が不整方向に多数残っている。何らかの打楽器のような用いられたもの

かも知れない。

28・亀甲文柄鏡(図53) 日本・個人蔵

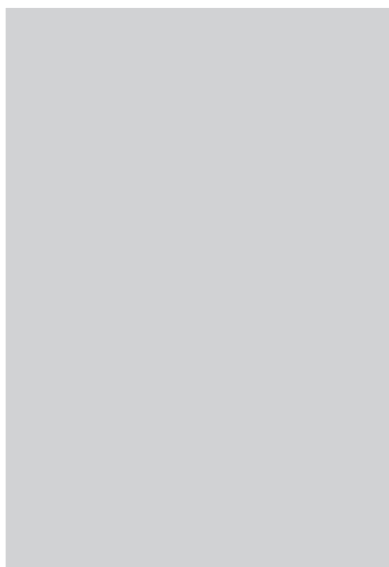
面径九・五cm 縁高〇・四cm 縁幅〇・一cm 柄長七・三cm 柄幅一・八cm

フエで収集されたもの。表裏面にやや白っぽい土が薄く固着しており、出土鏡の可能性が高い。直立細縁。全面に亀甲文を表すが、鑄出がきわめてあまい。下寄りに鑄欠けの穴があり、鏡面と柄の境の段差が不明瞭で、柄の両側も凹凸があるなど、日本鏡をベトナムで踏み返したものとみて間違いない。ただI b類、I c類と異なり、踏み返し後も柄鏡として用いている。柄の長さが原型鏡と同じだとすると、面径三寸鏡において柄長七・三cmは相当短い部類で、江戸時代中期から後期、十八世紀の柄鏡を原型としたものと考えうる。なお本品は、柄の取り付きの鏡面側で割れたものを再度接合しているが、出土後の作業とみられる。地金は赤銅色で、全体に暗灰色の古色を呈する。鍍錫は認められない。

29・籬桜樹柄鏡(図54) 日本・個人蔵

面径一〇・二cm 縁高〇・三cm 縁幅〇・二cm 柄長八・六cm 柄幅二・〇cm

ダナンで収集されたもの。表裏面に暗灰色の土がかたくこびりついており、出土鏡とみられる。直立中縁。右下に籬を配し、



挿図11 籬桜樹柄鏡 陽鑄銘

その背後から桜樹が立ち上がる図様をやや高肉に表す。砂目はやや大粒で、密に打つ。左端に「天下一藤原作」と銘を陽鑄する。これらの特色は、江戸

時代中期、十八世紀前半頃の特色を示す。しかし、文様鑄出は著しく不鮮明で、銘は判読が困難なほどである(挿図11)。鏡部と柄の境の段差はほとんどなく(挿図12)、鏡背面の周縁と柄の境

もあいまいである。また鏡背面からみて左上方がややへこむのは、湯口の鑄バリを削り過ぎたためとみられる。以上から、本鏡はベトナムにおける踏み返し鏡と判断される。新しい傷部分にみえる地金の色は、暗い黄銅色を呈し、現状で濃暗緑色を呈している。鍍錫は認められない。

30・菊花紋柄鏡(カラー図版23、図55) ハノイ歴史博物館蔵

(I23882 [LSb2294])

面径一〇・五cm 縁高〇・三cm 縁幅二・五cm 柄長八・一cm

全面を厚い緑青が覆い、きわめて硬い土や布、有機物が付着した出土鏡である。台形縁で、中央に十二弁の菊花紋を大きく据える。紋の中に砂目は打たず、外側も鍍と土のため砂目の有無は明らかでない。文様の鑄出はきわめてあまく、鏡面と柄の境の段差がまったくないことから、ベトナムにおける踏み返し鏡と判断される。原型鏡は、前掲の籬桜樹柄鏡より柄がさらに短く、江戸時代中期、十八世紀の製作とみている。

31・32・蓬葉柄鏡(カラー図版24-1・2、図56-1・2・3・4) 日本・



挿図12 籬桜樹柄鏡 鏡部と柄の境

個人蔵

(A) 面径一四・八 cm 縁高〇・三〇・三五 cm 縁幅〇・一五

〇・二 cm

柄長九・八 cm 柄幅一・七五〇・二・一 cm

(B) 面径一四・九 cm 縁高〇・三〇・四 cm 縁幅〇・二〇・

三 cm

柄長九・九五 cm 柄幅一・八〇・二・一 cm

フエで出土したと伝える同型鏡二面である。いずれも表面の一部に炭状の汚れを認めるのは、埋蔵状態による可能性が高い。直立中縁の鏡ではあるが、縁高・縁幅とも一定でなく、柄も形の歪みが顕著で、先へ向かって細る。鏡面と柄の境の段差は全くなく、鏡背面の周縁と柄の境もあいまいである。鏡面は完全に平滑でなく、鏡背・鏡面とも各所にスの目立つ箇所がある。鍍錫は施されていない。とくに柄先にスが顕著で、この方向に湯口もしくはアガリが設けられたとみられる。銅色は、両者ともやや黄味がかった赤銅色を呈する。一見して、日本鏡をベトナムにおいて踏み返したものと判断でき、同型鏡が一括で発見された唯一の例である。原型となったのは、垣の前後に松樹と竹、左方に飛翔する鶴、下端に亀をやや薄肉に鑄出し、左端に「天下一藤原作」銘を陽鑄した、江戸時代中期、十八世紀の蓬萊柄鏡である。

〔Ⅲ類〕

33. 竹梅山水鏡 (カラー図版25)

日本・個人蔵

面径一〇・七 cm 縁高〇・二五 cm 縁幅〇・二五 cm

ホイアンで収集されたもの。直立中縁。地を霰地とし、右方に岩石と樹木、舞台などの山水図に梅樹を加え、左方に笹竹をやや高肉

に鑄出す。文様はやや不鮮明で、周縁下端に柄の跡がまったくなく上に、鏡面全面にわずかな凹凸と細かなスを認めるので、日本製ではなく、ベトナムで柄鏡の円鏡部のみを踏み返した可能性が高い。銅の地金も薄く黄色味がかり、通有の柄鏡と異なる。上端に直径約三mmの紐穴を二個あけるのも、鑄造当初から予定されていたものであろう。なお左端の陽鑄銘に、本来「天下一藤原作」とした銘の「天下一」を消した痕跡があるのは、天下一号の天和の禁令によるものと思われ、原型の柄鏡の製作は十七世紀後葉頃とみなされる。

34. 抱茗荷紋山水鏡 (図57) フエ王宮美術館蔵 (BTH1259

〔DG564〕

面径八・七 cm 縁高〇・三 cm 縁幅〇・二 cm

背面全体に明緑色の鍍が薄くつき、両面の一部には硬い土がこびりついていて、フエ周辺で出土した可能性が高い。直立中縁。手持ち三条の丸に抱茗荷紋を上方に配し、右下半に山水図を薄肉に表す。砂目は細かく、密に打つ。文様鑄出はあまく、周縁下端の上面がやや盛り上がりつつ挿図13、スも認められる。これはベトナムにおいて、

原型の柄鏡の鏡面のみを踏み返し円鏡を鑄造した際の湯口痕とみられる。周縁の内側の三方に、方形の穴をあけており、板などに打ち付けて使用したものと推定されよう。地金は黄銅色を呈し、鏡面に鍍錫は認められない。なお、左端に陽鑄される「天下一藤原重義」は、江戸時代前期から中期にかけ京都で活動した松村因幡守藤原重義のことで、本鏡の原型鏡



挿図13 抱茗荷紋山水鏡 周縁上面の盛り上り

も十七世紀末ないし十八世紀初め頃に製作され、ベトナムにもたらされたものと考えられる。

35・菊花紋鏡(図58) 日本・個人蔵

面径七・八cm 縁高〇・二五cm 縁幅〇・一〇・二cm

ハノイで収集されたもの。白っぽい砂質の土が硬くこびりつき、出土鏡の可能性が高い。中央の円内に十六弁菊花紋を線描で表し、外区を霰地とする。しかし直立中縁ながらも縁幅が一定せず、文様鑄出も著しくあまいので、日本以外での踏み返し鏡とみていい。原型鏡は江戸時代中期、十八世紀に製作された柄鏡か。ただ本鏡は、踏み返し後もⅡ類のごとく柄鏡として通用したようで、柄が折損した後に外周近くに径約一mmの紐穴を二個あけて、懸鏡として再度使用したものである。踏み返しがベトナムで行われたかどうかは断定し難いが、同型鏡がそれ以外の地域にも見られないので、当地において二度にわたる日本鏡の改作がなされたと想定される。地金は赤褐色で、全体に暗緑色の古色を呈する。鏡面に鍍錫は認めない。

36・玉桂字杜若鴛鴦鏡(カラー図版26) ハノイ歴史博物館蔵

(I21550 [LSb2338])

面径一六・八cm 縁高〇・二五cm 縁幅〇・二cm

全面に薄く緑青が覆い、土が付着していて、出土鏡とみられる。直立中縁。「玉桂」の文字を表し、右下には杜若の咲く水辺の岩場に遊ぶつがいの鴛鴦を薄肉に表す。中国南北朝時代の詩集『玉台新詠』第十卷に載る「南山一桂樹 上有雙鴛鴦 千年長交頸 親愛不相忘」や、平安時代の私撰歌集『新撰万葉集』に載る「のちついにかにせよとか玉桂 恋ひする宿に生ひまさるらむ」に拠った古典図様である。左端に「天下一藤原政重」と銘を陽鑄する。鑄出は著

しくあまく、踏み返し鏡とみて間違いない。日本でも江戸時代になると

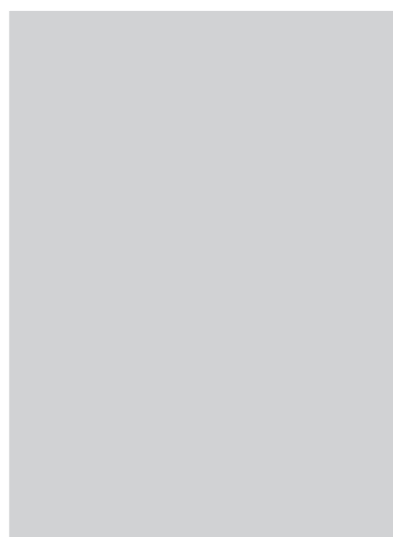
鏡の踏み返しは普通に行われるが、本鏡は大粒で密に打った砂目を踏み

返し後の鑄型の段階で撫で消している。また、文様より相対的に鮮明に見えるはずの文字も、立ち上がり不明瞭になっていて、日本ではなくベトナムで踏み返ししたものと考えられる。周縁下端に柄の痕跡は見られず、当初から鏡背のみを踏み返して円鏡として製作したらしい。同じ図様、鏡師銘で径八寸の大型柄鏡が知られ(挿図14)、江戸時代中後期、十八世紀後半の鏡を原型としたものである。

37・鶯字梅竹鏡(図59) ブンタウ・ホワイトパレス蔵

面径九・七cm 縁高〇・五cm 縁幅〇・二cm

ベトナム南部、ホーチミン市南東の港町、ブンタウ沖合で発見された沈没船から引き揚げられたもの。大量の景德鎮磁器を積載していたヴンタウ・カーゴは、積載品に清初・康熙帝期の銅銭や「庚午」銘(康熙二十九年「一六九〇」か)の墨を含むことから、一六九〇年代に中国南部の港を出て、ヨーロッパへ向け航行中に沈没したジャンク船と考えられている。厚い樹脂含浸が詳細観察を難しくしているが、直立中縁の小型円鏡で、下方に梅樹と竹をやや高肉に表し、上方にはそれに対応する「鶯」字を配していることが窺える。地には、やや細かい砂目を密に打つ。一見、江戸時代の懷中鏡とも



挿図14 玉桂字杜若鴛鴦図の大型柄鏡 東京国立博物館蔵

思えるが、鈕が通有のごく小さな山形でなく、大ぶりの半球形を呈していることと、一部が「鶯」字を切っていることから、柄鏡の鏡背のみを踏み返し、鈕を加えて円鏡としたことがわかる。前掲の各事例からわかるように、ベトナムでは、このように全く別種の鈕を付設して鏡胎を改作する事例は他に知られず、船の性格からしても、中国南部で踏み返し製作された鏡の可能性がきわめて高い。

〔Ⅳ類〕

38・素文鏡(図60) フエ市・個人蔵

面径八・八cm 縁高〇・三cm 縁幅〇・三cm

フエで収集されたもの。薄く黄灰色の土が付着しており、出土鏡とみられる。直立中縁の円鏡で、太い界圏の外側に連珠文帯がめぐりをかろうじて目視できる。前掲のⅡ類、浮線綾文双鳥鏡と同じ南北朝時代、十四世紀の擬漢式鏡にみる外区文様に他ならないが、内区が素文となる。このような素文鏡は膨大な日本鏡には類例が皆無であり、おそらく日本鏡の踏み返しで幾度も重なったために文様がわからなくなり、最終的に鋳型の文様痕跡を撫で消して素文としたのであろう。頭のやや平坦な半球形鈕は、いうまでもなく当初の原型鏡のそれとはまったく形が変わっている。製作は原型鏡の時期より大幅に降る可能性が高いが、中国・明代の鏡に通じる鈕形であることから、十六世紀を降るものではないであろう。

39・素文鏡(図61) 日本・個人蔵

面径一三・六cm 縁高〇・三cm 縁幅〇・一cm

ホーチミンで収集されたもの。周縁断面が略三角形を呈し、一本の界圏をめぐらした素文鏡。鈕はごく小さな円錐形で、穴をあけていない。中世・近世の東アジア各地で、円鏡に界圏をめぐらすのは、

ひとり平安時代後期から室町時代の日本鏡に特有の属性である。文様がなく、不確定要素がなくはないが、日本中世の銅鏡を念頭においた鏡胎とみるのが妥当であろう。ただ外周の凹凸が著しく、ベトナム以外の他地域からの舶載ともみなし難い。前掲、Ⅱ類の浮線綾文双鳥鏡やⅣ類の素文鏡のように、十四世紀代の日本の擬漢式鏡を踏み返した作例が存在するので、当地においてもこのような鏡胎の創出が起り得たと考えておきたい。

40・龍文柄鏡(図62) ハノイ歴史博物館蔵(D163・78

〔LSb2325〕

面径八・五cm 縁高〇・三cm 縁幅〇・一五〇・三cm 柄長七・七cm 柄幅二・〇cm

鏡背面の所々に薄く緑青が付着するが、全体に状態が良く、伝世鏡の可能性が高い。鏡面径と柄長がほぼ同じ長さの柄鏡で、一見すると江戸時代前期、十七世紀半ばから後半にかけての鏡胎に見える。しかし、周縁の縁幅が一定せず、鏡面がやや凸面をなし、柄を含め全体に弱い弓なりになるなど、通形の柄鏡と異なる。鏡背には、大きく体軀を曲げた龍をやや高肉に表し、背景に?形に巻き込む雲を散らしている(挿図15)。

挿図15 龍文柄鏡
鏡背面部分

いことからしても、日本製柄鏡に擬した柄鏡の鏡胎に、中国の影響の強かったベトナムならではの龍文を表した地元製の柄鏡とみなされる。注目されるのは、鏡面・鏡背面の柄との境にヤスリを入れて、段差を明瞭に表そうとしていることで、日本製柄鏡の基本原則を知っていて、それに近づけようとしたものと思われる。ただ、文様の鑄出は不鮮明で、ベトナム国内における同型鏡の存在を予想させる。

41. 牛人物柄鏡（カラー図版27、図63-1・2） ホーチミン市ベトナム

歴史博物館蔵（B.T.L.S. 3905・5）

面径一〇・五cm 縁高〇・四cm 縁幅〇・一〜二cm 柄長九・〇cm

全面に緑灰色の緑青を生じ、出土鏡とみられる。外形こそ日本の柄鏡に似るが、鏡胎、図様ともに原則にのっとらない、すこぶる個性的な作例である。周縁は直立するが幅が一定しない。鏡部と柄の境を画すという意識はなく、両面とも段差がないどころか、周縁が

挿図16 牛人物柄鏡 鏡背面部分

挿図17 牛人物柄鏡 鏡背面部分

鏡部から折れ曲がり、柄も含めて全周する。このような周縁は、中国・宋代の柄鏡に見られ、その影響を受けた可能性も否定できないが、鏡面全体に以下の絵画的図様を描くという発想は、日本鏡のそれを踏襲したものではない。なだらかな土坡を牛が行き、後ろでベトナム人らしい三角笠を被った人物が手綱を曳いている。背後には枝を張った樹木が立つ。特異なのはその表現技法で、図様をゆるやかに鑄出した後に、鋤彫り（幅広の鑿で面的に彫り下げる技法）で縁取って、より立体感を出している。とくに枝葉の下辺には、鑿の動いた跡まで見える（挿図16）。さらに牛の足や尾は、太い沈線で縁取る（挿図17）。人物の右手には、「青」字にみえる隆線がある。鑄造技法にも習熟していなかったようで、柄は鏡面の各所に大きなスガ残り、鏡背面からみて左端を大きく鑄掛けする。製作年代を絞り込むのは難しいが、鏡面・柄の法量からすると、十七世紀後半から十八世紀初め頃の日本柄鏡を参照したものと推測される。

42. 蓮池図柄鏡（カラー図版28）

フエ王宮美術館蔵

（B.T.H.1226 [DG10]

141435）

面径一二・五cm 縁高〇・三cm

縁幅〇・一〜二cm 柄長三・二

cm（現存長）

両面ともやや粉っぽい薄緑色の錆に薄く覆われ、フエ周辺で出土した鏡とみられる。幅狭の柄がつく柄鏡ではあるが、背面に蓮池を

挿図18 蓮池図柄鏡 鏡背面部分

ごく細い隆線でたどどしく描く。周縁は断面略台形で、凹凸が目立つ。背面の地には、鑄型のヒビによるらしいバリや、熔銅が凝固する際に生じる鑄皺がみられる(挿図18)。鏡面と柄の境には段が全くつかず、柄の断面も、背面側に法をつけている。外形こそ日本の柄鏡を真似るものの、鏡胎・文様ともに稚拙さは免れず、鏡鑄造の経験の少ないベトナムの工房で製作されたと思われる異例の柄鏡である。

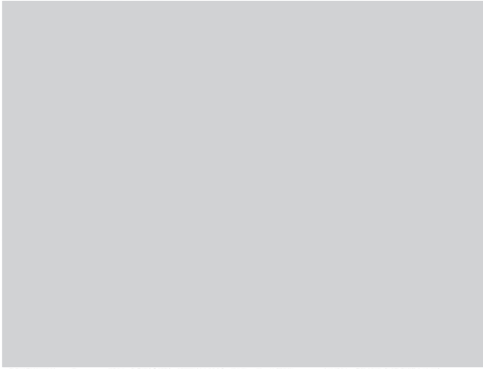
43 松藤梅尾長鳥柄鏡(図64)

ホーチミン市ベトナム歴史博物館

蔵(B.T.L.S. 3786)

面径一六・六cm 縁高〇・三cm 縁幅〇・二cm 柄長一〇・九cm

台形縁で、とくに内側が斜めに立ち上がる。文様は細い隆線による線描表現で、一見して日本の柄鏡とは異なる。梅樹と思しい花樹に尾長鳥がとまる。下方に岩礁、上方に松樹が配され、いわゆる荒磯文にみえる。注目すべきは、松樹の右側に表される垂下文様で、松にかかる藤花を荒磯の白波になぞらえた、平安時代にはじまる古



挿図19 松藤梅尾長鳥柄鏡 鏡背面部分



挿図20 松藤梅尾長鳥柄鏡 款記

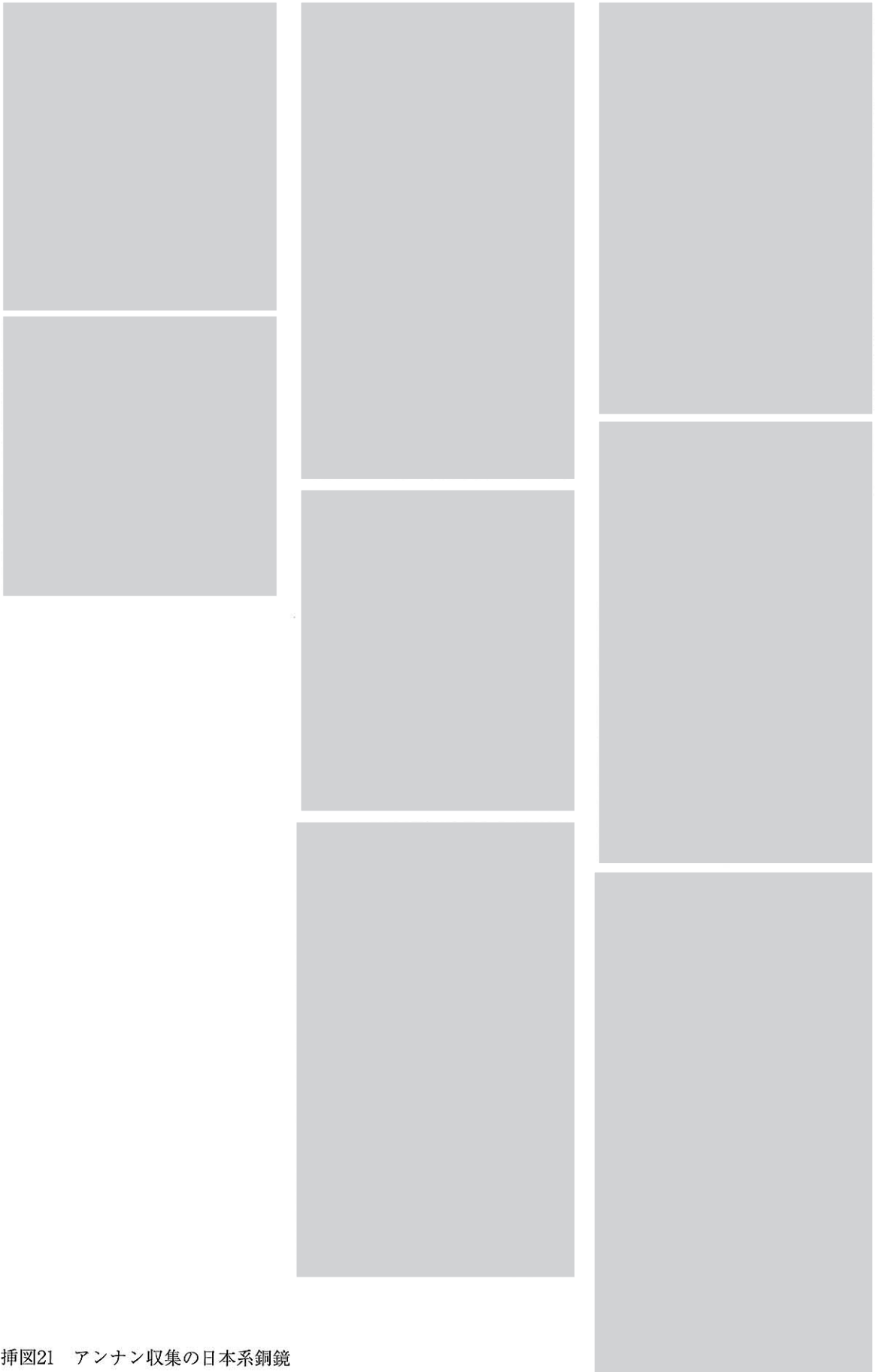
典文学意匠である(挿図19)。すなわち図様はすこぶる日本的にもかかわらず、表現技法はまったく異なっている。地に砂目はみられず、全体に粗い鑄肌を残す。左下には、方形枠内に「包換青銅」と款記を入れる(挿図20)。このような方格款記は中国鏡にしばしば見られるところで、この柄鏡も中国で製作されたものがベトナムに舶載された公算が大きい。

二 日本系銅鏡の受用動向

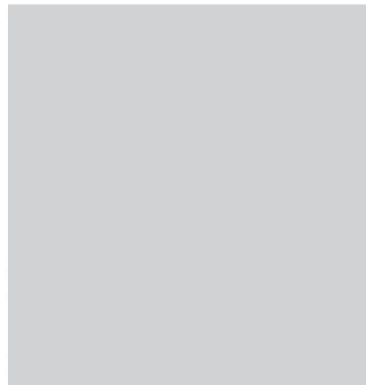
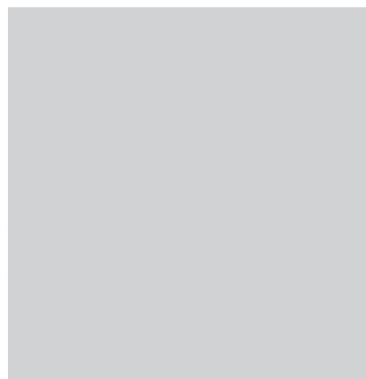
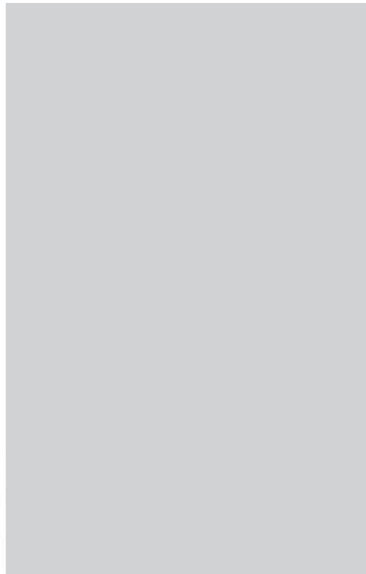
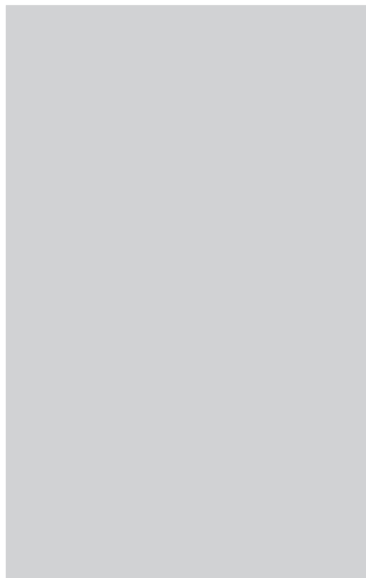
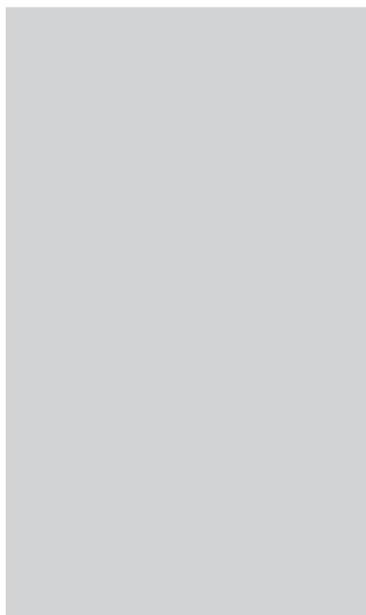
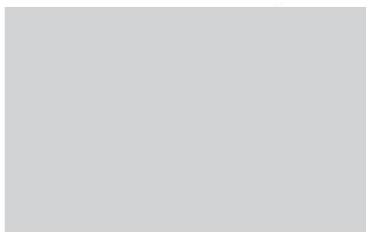
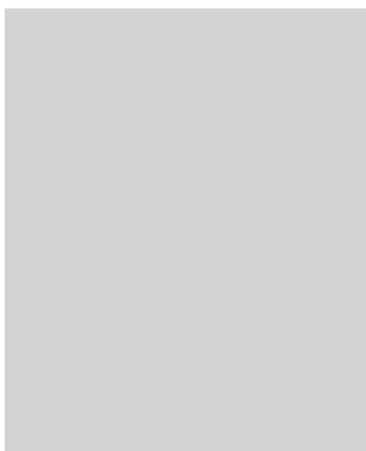
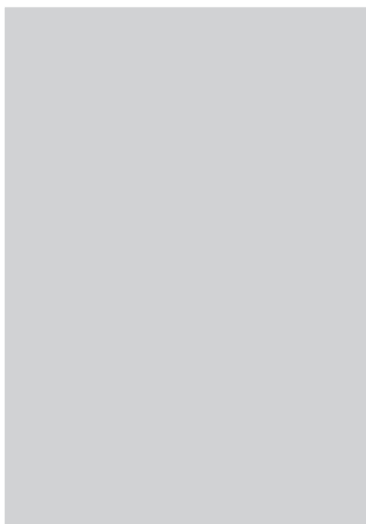
(1) ベトナムにおける事例数

ベトナムにおける日本系銅鏡の存在は、意外と早くから知られていた。一九三三年に、フェのカイディン博物館長「*Dr. Peyssonnaud*氏が、インドシナ半島で日本人が植民したトンキン(北部ベトナム)、コーチシナ(南部ベトナム)、カンボジア、アンナン(中部ベトナム)から発見された日本関係遺物を報告したなかで、アンナンで収集した銅鏡七面を紹介している(挿図21)。これを受け、翌一九三四年に慶応義塾大学の松本信廣氏が、ハノイのフランス極東学院所蔵の安南拓本資料から二面の円鏡を紹介し(挿図22)、それらをフェイホ(ホイアンの旧称)で出土したものと推定した。

大戦後は、*Leon Vandermeersch*氏が、フランス極東学院ルイ・フィノ博物館旧蔵でハノイ歴史博物館所蔵の一〇〇面に及ぶ銅鏡を報告し、その中に日本系銅鏡が五面含まれている。これら五面については筆者も調査し、前章で詳述したところである。最近では、*Ho Xuan Em・Ho Anh Tuan*両氏が中部ベトナムで発見された鏡を紹介した図録中に、六面の日本系銅鏡が含まれている(挿図23)。



挿図21 アンナン収集の日本系銅鏡



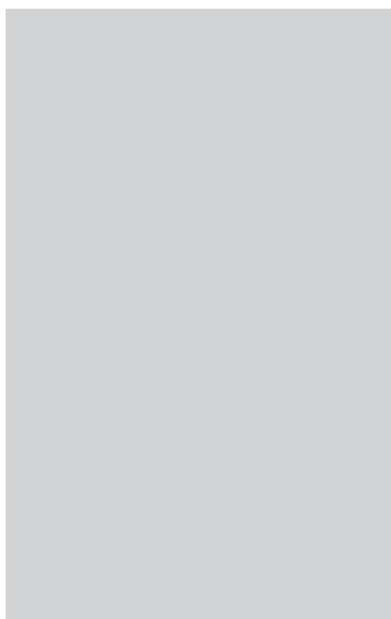
挿図22 仏極東学院蔵安南拓
本資料の日本系銅鏡

挿図23 中部ベトナム発見の日本系銅鏡

これらは、クアンチ、トゥアティエン（フエ）、クアンナムという中部ベトナム三省の発見地が明記されている点で重要なデータである。ただし著者は日本鏡に関する知識がなかったようで、これらすべて中国の東晋から唐にかけての鏡と誤認している⁽⁸⁾。

これらの先行研究を受け、筆者は一九九八年から二〇〇二年にかけて、ベトナム所在の博物館、古美術商と、越・日の個人が所蔵している日本系銅鏡の探索を行い、前章で掲げた四三面の銅鏡を実査した⁽⁹⁾。それら以外にも、撮影することができた作例が三面ある。挿図24は、ハノイ市の個人所蔵になる抱き柵葉紋七宝繋ぎ雲柄鏡（「天下一藤原作」銘）で、日本から舶載されたIa類である。挿図25は、フエ市の個人蔵になる蓬葉柄鏡（「永松山城掾藤原重光」）で、踏み返しが進んでいるが、日本からの舶載柄鏡を置鏡式の円鏡として用いたIc類である。挿図26は、ハノイ歴史博物館所蔵の桔梗紋流水鏡（「天下一佐渡守」銘）で、ケース越しに観察した限りでは、周縁外側に異例のヤスリ仕上げ痕がめぐっており、ベトナムで鏡部のみを踏み返して円鏡にしたⅢ類の可能性が高い。

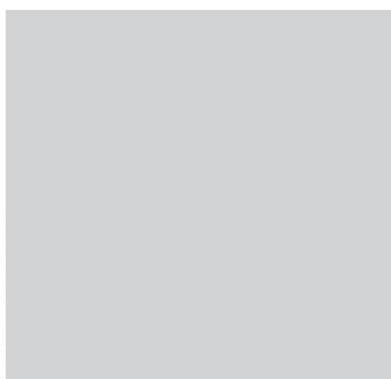
以上を総合すると、ベトナムにおける日本系銅鏡は、詳述の四三



挿図24 抱き柵葉紋七宝繋ぎ雲柄鏡



挿図25 蓬葉柄鏡



挿図26 桔梗紋流水鏡

面と前段で示した三面、J.H.Peyssonnaud氏報告の七面、松本信廣氏報告の二面、Ho Xuan Em・Ho Anh Tuan両氏報告の六面、合計して六一面もの事例が知られるのである。筆者は前述の期間に、東南アジアのタイ・カンボジア・フィリピン・インドネシアでも日本系銅鏡を探索したが、カンボジアで二面、タイで一面の情報を得ただけで、ベトナムのしかも中部における事例集中が特筆されるのである。

（2）銅鏡受用の時期と形態

これらの日本系銅鏡が、いつ頃、どのような形で受用されたか概観しようとする、実査し得た四三面を対象とすれば、数的に十分であろう。表は、IⅠⅣの諸類型ごとに四三面の製作時期をプロットしたものである。（なおⅡ類以下は、ベトナムにおいて踏み返されたり、円鏡に改作されたりしたもので、江戸時代の柄鏡の年代観が厳密に適用できない。本文、表においても絞り込みの幅を広くとっているのはこのことによる。）

中世、とくに鎌倉時代から南北朝時代にかけて、朝鮮半島、中国南部、琉球など東アジア各地に日本鏡が移出されたことは、これま

でも述べてきたところである。⁽¹⁰⁾ベトナムにもその流れが及んでいたことが25（以下、前章の鏡番号のみ示す）よりわかる。留意したいのは、すでにこの時期

に、日本からの舶載鏡が使用されただけでなく、ベトナムもしくは他地域で日本鏡の踏み返しが行われ、同型鏡が多数流通した^⑪ことである。長く東アジアの主流であり続けた中国の銅鏡が、宋時代に至って、素文の廉価な湖州鏡をはじめとして、意匠性の低下が顕著になったのに反比例して、日本銅鏡は、平安時代後期にいわゆる和鏡が成立して以来、絵画的図様の質とバリエーションが拡大していった。したがって、十四世紀の大陸で、そのような日本鏡の鏡背文様が支持され、踏み返し鏡が流通したとしても不思議ではなかったのである。

日本の桃山・江戸時代の銅鏡とそれらを踏み返したり改作した鏡がベトナムで本格的に受用されたのも、本質的には右と同じ理由によると思われる。ただその契機が、朱印

表 類型ごとの鏡の製作年代（番号は本文の鏡番号に一致する）

	14c	15～16c	16c末～17c初	17c前半	17c中頃～後半	17c後葉～18c初	18c前半	18c後半	19c前半～中頃
I a類			1	2	3, 11	4, 5, 6, 7	8 ----- 9		10
I b類					12	13 ----- 14, 15	16		
I c類				20 ----- 21	17, 18 ----- 22	19, 23		24	
II類	25			26 ----- 27		28, 30, 31, 32 ----- 29			
III類						33, 34, 37	35		36
IV類	39 ----- 38				40	41	42, 43		

船貿易の展開と、それにかかわった日本人の現地定住、すなわち日本人町の形成にあったことは想像に難くない。まだ日本人の往来できた時期、十七世紀前半に遡る1・2が完好な舶載柄鏡I a類であることが、それを暗示している。これらが朱印船による貿易品だった可能性をまずは考えねばならない。岩尾成一氏が「異国渡海船路積」などいくつかの朱印船史料からまとめた地方別輸出品目表^⑫によれば、台湾・マニラ・東京（北部ベトナム）・交趾（北・中部ベトナム）・占城（中・南部ベトナム）・東埔寨（カンボジア）・暹羅（タイ）のうち、輸出品目に鏡がみられるのは東京のみである。1・2がいずれも中部ベトナムで収集されたものと伝えることからすると、朱印船時代の舶載銅鏡の流通圏はハノイからホイアンまでのベトナム北半だったとみられる。なお、このような早い時期の舶載柄鏡は、貿易品でなく、来越した日本人の携行品だった可能性も十分ある。その場合、明らかに墓出土品とみられる2などは、日本人墓に副葬されたものということになる。

日本系銅鏡がベトナムで多く見られるのが十七世紀後半から十八世紀にかけての一世紀半の間であったのは、表から一目瞭然である。舶載鏡のI類が半数以上を占め、これらの多くは長崎を窓口とした中国・オランダの貿易船によりもたらされたものに相違ない。重要なのは、この時期になると、舶載鏡の柄を無くして円鏡とし、紐穴をあけて懸鏡としたI b類や、穴をあけず置鏡として用いたI c類が相当数みられることである。ベトナムを含むインドシナ半島では、伝統的に小型の懸鏡と中型・大型の円鏡を置鏡として用いていた。例えば挿図27（面径七・〇cm）、挿図28（面径二〇・一cm）は、いずれもタイのアユタヤで収集された素文鏡で、建造年の知られる



挿図27 素文懸鏡



挿図28 素文置鏡

仏塔からの類品の出土例を根拠に、十四～十六世紀頃のものと考えられている。バンコク国立博物館には、後者の大きさの円鏡を受けた弓形の鏡台も收藏される。このような事情から推して、Ib・Ic類の鏡が主に現地の人々によって用いられたことはほぼ間違いないであろう。

ベトナムにおいて踏み返し製作されたとみられるⅡ類や、その上に柄や周縁に改作を加えたⅢ類も、基本的にはⅠ類と同様の使用のされ方であった。表を詳細に検討すると、Ia類と、それ以外のIb類・Ic類・Ⅱ類・Ⅲ類の間には、明確な時期差を見出せる。おそらくは十八世紀初め頃までに日本からの銅鏡移入が減少し、ベトナムにおける鏡需用を補うべく踏み返し製作が進められたと考えられよう。

もつとも、そのような作業がどのような工房で行われたかはいまだ不分明である。先稿で述べたとおり、中国においては、日本鏡の文様のみを踏み返して独自の鏡胎形式に作り変えたり、自らの工房款記を加えたりするなど、浙江・湖州や福建・漳州の銅鏡専業の工房が製作に関わったのに対して、ベトナムでは、鏡の単純な踏み返

しや軽微な改作に終始していて、鏡専業工房の関与が想定しづらい^⑬。可能性の一つとして、フェ市郊外で今も青銅や真鍮の鋳物製作を専業とするフォン・ドック村を挙げうる。十七・十八世紀に中部ベトナムを支配していた阮氏が、手工業生産部門を政治的に編成し、このような銅器一般を鑄造する工房で副次的に銅鏡を量産していた、というような状況を想定することができるかも知れない。

三 結語―ベトナムにおける日本系銅鏡への嗜好とは―

小稿では、ベトナムで出土、伝来した日本系銅鏡について、とくに実査し得た四三面の概要を報告した。これらのうち、日本から舶載された柄鏡は十六世紀末ないし十七世紀初め頃から事例がみられはじめ、東南アジアに進出しはじめた日本人商人の動向と一致する。しかし大方の鏡は、日本人の海外渡航・帰国が禁じられて以後の十七世紀後半から十八世紀のもので、しかも舶載の柄鏡を円鏡に改変し懸鏡や置鏡として用いたものや、明らかに現地で踏み返したもの、踏み返し後に鏡胎の形状を現地スタイルに改編したもの、さらには現地独自の文様を表した柄鏡まで存在する。すなわち大半の日本系銅鏡は、中国とオランダのみに許された交易によってベトナムにもたらされ、改作されたりコピー鏡が作られるなどして、残留日本人のみならず、当地の人々が自らの生活文化の中に取り入れた日常生活用具にはかならない。

しかし、これらの存在意味を考える場合に重要なのは、前節で述べた生産・流通の問題もさることながら、そもそも日本系銅鏡の何がベトナムの人々に評価され、現地製作まで行われるようになった

のか、ということである。日本鏡の特色である柄鏡の形を改変した例が多いので、少なくとも鏡胎形式が積極的評価を受けたとは考えにくい。やはり、前節でふれたように、アジア全域でも抜きん出た日本鏡の意匠性によったとみるのが素直な解釈であろう。ただし、時代・地域を問わず、異国の銅鏡を受用する際には、そのすべてを受け入れた訳でなく、必ず何らかの嗜好による選択が働いていたはずである^(註)。

前章で報告した四三面の鏡背文様を概観すると、松・鶴や蓬萊文、竹梅文、菊文、山水文などが目につく。インドシナ半島でもとりわけベトナムは、歴史上、中国文物が断続的に流入した漢文化圏であり、この点で日本と似たところがある。したがって、これらの文様が長寿、吉祥を含意することは、十分理解されていたであろうし、山水文は中国のイメージそのものを体現していたのかも知れない。やや踏み込んだ言い方をするならば、ベトナムの人々は、日本系銅鏡の意匠を通して、中国を見ようとしたのではないか。もともと、南天や万両、橘といった日本固有の吉祥文については、その装飾性がベトナム人の嗜好に直截合致したものと思われる。

一方で、文字入りや家紋入りの鏡が目につくことも留意しなければならぬ。こちらは中国南部発見の日本系銅鏡には見られない特徴といえる。前者の文字入り鏡は、ベトナム人と中国系、日本系の人々が意味を共有できる漢字に対する特別な関心を暗示しているように思える。さらに言えば、これらの鏡の需用が中国系の人々にも及んでいたことを示すのかも知れない。また家紋は、日本における意味を離れて、鏡の所有者、あるいは家を示す記号であった可能性が考えられる。

以上のように考察を及ぼしてくると、最後に残るのは、これらの銅鏡がベトナムの人々にとって「日本起源のもの」あるいは「日本的なもの」としてどこまで認識されていたか、という疑問である。冷静に考えれば、江戸時代の日本人の生活文化の中で、何が中国起源か、はたまた中国のなるものか、正確に認識されていたものは少なかったであろう。日本文化における「和と漢」の切り分けが意外に難しいのと同様に、ベトナムにおける生活文化も「越と漢と日」を切り分けるのが容易でない、という簡明なことに改めて気付かされる。これが環シナ海をめぐる文化を理解する上での要諦であり、それを踏まえない安直な流通論や比較文化論に墮しては、東アジア工芸史を深めることは到底できないと自戒されるのである。

ベトナムにおける日本系銅鏡の調査にあたっては、ハノイ歴史博物館、ホーチミン市ベトナム歴史博物館、フエ王宮美術館、ヴンタウ・ホワイトパレスの館員各位、ハノイ国家大学グエン・ヴァン・キム氏、昭和女子大学菊池誠一・阿部百合子両氏、国立歴史民俗博物館村木二郎氏に格別のご高配・ご協力をいただいた。深甚の謝意を表したい。

本稿は松下国際財団一九九八・九九年度研究助成「東アジア地域における日本製銅鏡の需要と模倣鏡製作に関する研究―中・近世の交易と製品製作プロセスの地域間比較―」の成果による。

〈註〉

- 1 久保智康「中国・ベトナムにおける十七・十八世紀の日本系銅鏡」『考古学ジャーナル』四六四号 ニューサイエンス社 二〇〇〇年。

- 2 久保智康『中世・近世の鏡』（日本の美術三九四号）至文堂 一九九九年。同「朝鮮半島における日本系銅鏡」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店 二〇〇二年。薛暁・鄭東（久保智康訳註）「中国で発見された十五〜十八世紀の日本銅鏡」『考古学雑誌』八四巻三号 一九九九年。
- 3 鏡の製作年代については、前掲注2 久保一九九九年文献を参照されたい。
- 4 職人が自らを「天下」と称する事象は桃山時代頃に一般化したとされ、銅鏡においては、京都の鏡師木瀬浄阿弥が十六世紀後葉とみられる柄鏡に「天下」浄阿弥」と銘を陽鑄するのが早い例である。本鏡のごとく「天下」のみを陽鑄することは十七世紀に流行した。
- 5 J.H.Peyssonnaud : CARNETS D'UN COLLECTIONNEUR — Objets nationaux japonais retrouvés au Tonkin, en Cochinchine, au Cambodge, en Annam, et provenant des anciennes Colonies japonaises en Indochine. — LES MIROIRS DE BRONZE : BULLETIN DES AMIS DU VIEUX HUE, 204, 1933.
- 6 松本信廣「安南發見の和鏡」『史學』一三卷一三三 三田史學會 一九三四年。
- 7 Leon Vandermeersch : LES MIROIRS DE BRONZE DU MUSEE DE HANOI : ECOLE FRANCAISE D'EXTREME-ORIENT, PARIS, 1960.
- 8 Ho Xuan Em・Ho Anh Tuan : BI AN VE NHUNG CHIEC GUONG CO (DUOC TIM THAY TRONG CAC DI CHI CHAMPA) O MIEN TRUNG VIET NAM (中部ベトナム・チャンパ遺物に見られる古代銅鏡の謎) : NHA XUAT BAN DA NANG, 1998.
- 9 Pham Huu Cong, Tomoyasu Kubo : NHUNG CHIEC GUONG DONG NHAT BAN TAI BOA TANG LICH SU VIET NAM-TPHO CHI MINH (ホーチミン市ベトナム歴史博物館所蔵の日本銅鏡について) : Nhung phat hien moi ve Khao co hoc nam 1999 : NHA XUAT BAN KHOA HOC XA HOI, 2000.
- 10 前掲注2久保二〇〇二年文献。および久保智康「新安沈船に積載された金属工芸品—その性格と新安船の回航性をめぐって—」『九州と東

- 11 アジアの考古学—九州大学考古学研究室五〇周年記念論文集—。同刊行会 二〇〇八年。同「琉球の金工」（日本の美術五三三）ぎょうせい 二〇一〇年。
- 12 当該時代の日本国内の鏡工房では、一部例外を除いて、鏡の踏み返しは行われず、一面一範製作を墨守したので、大陸発見の同型鏡や明らかな踏み返し鏡は、大陸某所で製作されたとみてほぼ間違いない。久保智康「中世銅鏡の在地製作—蒲生八幡神社と勝栗神社の踏み返し鏡をめぐって—」（鑄造遺跡研究資料二〇〇四）鑄造遺跡研究会 二〇〇四年）を参照。
- 13 岩尾成一『新版 朱印船貿易史の研究』吉川弘文館 一九八五年 二八八頁。
- 14 前掲注1文献。
- 15 前掲注2久保二〇〇二年では、中世日本鏡の朝鮮半島への移出の背景に、長寿の含意としての菊花文への理解があったと考えた。また、久保「東アジア銅鏡における鳥文意匠の共有」（『鏡にうつしたされた東アジアと日本』ミネルヴァ書房 二〇〇三年）では、中国と日本の銅鏡で共有される鳳凰・鸞・鵠などの鳥文について、各々の含意を漢字文化圏の中で共有していたことを述べた。